

平成三十一年（二〇一九）三月二十八日発行
『大倉山論集』第六十五輯 抜刷
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

副島種臣と銭子琴

—明治初年、日中文化交流史の一コマ—

島 善 高

副島種臣と銭子琴

—明治初年、日中文化交流史の一コマ—

島 善 高

目次

はじめに

一 銭子琴の家庭環境

二 明治維新（一八六八）前後、長崎・上海

三 明治九（一八七六）年、京都・近江八幡

四 明治十（一八七七）年、上海—上海東本願寺別院と

銭子琴—

五 明治十（一八七七）年、上海—曾根俊虎・副島種臣

らと銭子琴—

六 明治十一（一八七八）年、上海—吉岡拜山と銭子琴

—

七 明治十二（一八七九）年、長崎・東京—漢詩人との

交流—

八 晩年の銭子琴

おわりに

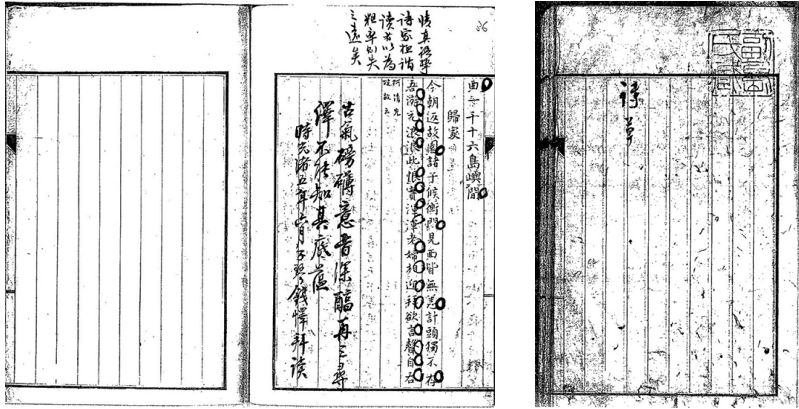
はじめに

明治六（一八七三）年四月三十日、外務卿副島種臣（一九二八〜一九〇五）と清国直隸総督李鴻章（一八二三〜一九〇一）との間で日清修好条規の批准書が交換され、その直後の五月二十四日には上海日本総領事館も開設されて、日本と清国との正式な国交がスタートした。

副島は、続いて韓国との外交に取り組もうと意気込んでいたが、いわゆる明治六年政変で政界の第一線を退かざるを得ず、東京で悶々とした日々を送っていた。その後、明治九（一八七六）年になってようやく御用滞在を解かれた副島は、同年十月から明治十一（一八七八）年一月まで、今度は全く私的に中国江南地方を漫遊し、多くの文人たちと交わって、滞在中に約百首の漢詩を詠んで、『詩草』と題する冊子に纏めた（[図1](#)）。

清国漫遊から戻った副島は、駐日公使の何如璋及び明治十二（一八七九）年に東京に来た銭子琴に『詩草』の評閲を求めた。何如璋と銭子琴は副島の『詩草』全篇に丁寧な評閲を加えているけれども、両者のうち、何如璋はよく知られた人物であるのに対して、銭子琴の方は、殆んど知られていない。副島は銭子琴を「磊落襟懷」と評し、また銭子琴が死去したことを知って「錢君遺業足長吁」と悼んでいるように、副島に深い印象を残した人物である。銭子琴の遺業とは一体どのようなものであったのだろうか。

銭子琴については、従来、東亜同文会編『对支回顧録』が、佐賀藩出身者「城嶋謙蔵」の項で「明治四年上海在留中に、長崎駐在の清国領事銭子琴が贈った詩、及び其の頃上海に居た安田安養の君に贈った画とがある」と書き、銭子琴の詩二首を載せていることが知られている。



【図1】 副島種臣『詩草』 右は表紙、左は卷末。

銭子琴の詩

間遊浙水独登楼

このごろ浙水に遊び 独り楼に登る

名利而今付釣舟

名利は而今 釣り舟に付す

三尺龍泉七尺絹

三尺の龍泉 七尺の絹

江山風月我全収

江山風月 我全て収む

其二

飽飯完時一覺眠

飽飯し完る時 一に眠を覺ゑ

論詩品画自陶然

詩を論じ画を品すれば 自ずから陶然たり

有時写幅丹青壳

時有れば幅を写し 丹青を売る

不受人間作孽錢

受けず 人間 孽を作す錢

この記述は、銭子琴が長崎に滞在したことを示す貴重な情報であるが、しかし、銭子琴が明治四年に長崎駐在の「清国領事」であったというの、明らかに誤りである。何となれば、清国領事館が長崎に開設されるのは、明治十一年のことだからである。易惠莉「中日知識界交流実録——岡千仞与上海書院士子の筆話」も『対支回顧録』の記述を疑って、蘇州にあった貨幣鑄造所「宝蘇局」が銭子琴を長崎に駐在させていたのではないかと推測しているが、その証拠はどこにもない。そこで銭子琴に関する先行研究や史料をあれこれ探してみると、

- ① 金沢市教育委員会文化財課『金沢・常福寺歴史資料図録』（金沢市文化財紀要一一七、二〇〇一年三月）
 - ② 東浦町教育委員会『郷土の書家・画家 中川南巖 中川梅溪』（東浦町郷土資料館調査報告第二集、二〇〇一年三月）
 - ③ 梁永宣・真柳誠「岡田篁所と清末の日中医学交流史料」（『日本医史学雑誌』五一巻一号、二五～四九頁、二〇〇五年）
 - ④ 王宝平『清代中日学術交流の研究』（汲古書院、二〇〇五年二月）
 - ⑤ 王宝平「明治前期に來日した中国の文人たち」（『関西大学東西学術研究所研究叢刊』三二「東アジアの文人世界と野呂介石」、二〇〇九年三月）
 - ⑥ 陳捷「十九世紀八十年代中国書畫家的日本游歴」（関西大学文化交渉学教育研究センター、（中国）出版博物館編『印刷出版与知識環流—十六世紀以後的東亞』上海人民出版社、二〇一一年一〇月）
 - ⑦ 川邊雄大「東本願寺上海別院的出版活動」（中華書局等編『中華書局与中国近現代文化』復旦大學歷史系、出版博物館、二〇一三年一〇月）
 - ⑧ 蔡毅「頼山陽『日本外史』の中国への流布」（『日本漢文学研究』一二号、二松学舎大学二一世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」、二〇一七年三月）
- 等々に銭子琴の名が引かれており、さらに新たな事実も幾つか判明した。そこで本稿では、銭子琴についてこれまで知り得た事柄を書き記し、今後の研究の足掛かりとすることにした。
- なお銭子琴の字は字で、名は擘である。各種史料には「子琴銭擘」と署名をしており、「銭擘」とのみ書かれている場合もあるが、一般に「銭子琴」と呼ぶことが多いようなので、本稿でも「銭子琴」の呼称で統一を取ることに

した。また本稿は銭子琴の人となり及び動向を追求することを目的としているため、各種漢詩集に載せられた銭子琴の題、序文、跋文等は多くこれを割愛した。

一 銭子琴の家庭環境

銭子琴自ら記すところによれば、彼の故郷は江蘇省東南部梁溪（無錫）の金匱で、省城から百里の所であった。梁溪（無錫）は、呉越国（九〇七〜九七八年）を建てた錢鏐を祖とする家柄が多く、銭子琴もまたしばしば「呉越王孫」の印を用いている（図2）。

そこで『無錫錢氏宗譜（庚寅本）』⁽⁸⁾なる書の第四卷を繙いてみると、そこに「鼎三支昌九派」という一派の族譜が載っており、果たして



【図2】 銭子琴の「呉越王孫」印

三十三世、懌（字子勤、五品銜試用直隸州同知、癸酉歲纂修宗譜、克竟先志、道光甲午十二月初八日生、光緒癸未三月十七日卒、配國学生倪泰女、道光丙申三月初五日生、同治己巳六月初十日卒、合葬嶽山石臺子墳、継朱氏、道光己酉七月十四日生、光緒丁亥七月初十日卒、子一、滬生、朱出、早世、以弟愷次子炳魁嗣）

なる記述が見つかった（「子勤」と「子琴」は同音であり、子孫が誤って記したものと思われる）。これによれば銭子琴は呉越国初代国王錢鏐から数えて三十三世の孫であり、道光十四（一八三四）年十二月八日に生まれ、五品の位を

得て直隸州同知になったという。江蘇省には通州・太倉・海州の三つの直隸州があり、そのいずれかに配置されたと思われる。

ただし銭子琴が任官していたと思われる三十歳前後は、太平天国（一八五一～一八六四）の軍が江蘇省一帯を支配し、清朝軍との戦闘も絶えなかった時代であって、無錫も壊滅状態となった。一八六五年一月頃に蘇州・無錫の様子を見た外国人は、

無錫へ行く路上は至るところ雑草がはびこり、荊が生い茂っている（中略）沿道には数えきれないほどの白骨と腐敗した死体が転がり、見ただけで恐ろしくなってしまう。ここには物を売り買いする船はなく、商業も跡を絶ち、無錫はすでに廢墟となっていました。

と記しているほどである。⁽⁹⁾従って、銭子琴はその難を逃れるため、同治（一八六二～一八七四）初年、五たび長崎に行って文人墨客と交わった。中でも漢方医で文人でもある岡田篁所（一八二一～一九〇三）とは親しく、岡田も「乍浦人の王克三と徐雨亭（二人は書画を善くする）、そして学士である周彬如の三人が戦乱を避けて長崎に来て、五六年流寓、それぞれ潤筆料一千元を得て帰国した。その



【図3】 銭子琴と友人たちの寄書

他に銭子琴や蔣子賓も私と親しく交わった」と述べている。⁽¹⁰⁾銭子琴が二十才であった咸豊七（一八五七）年、蔣子賓や馮鏡如ら七名と寄せ書きした書幅が中国の古書サイトである「孔夫子旧书网」で売りに出されていたことがあるから、銭子琴と蔣子賓の二人は旧知の間柄であったことが知られる（【図3】）。

さて、銭子琴が上海虹橋頭の張宗衛内に仮寓していた明治五（一八七二）年三月二十九日、長崎から岡田篁所が訪ねてきたが、その時に銭子琴は「別後四載」と言っている¹¹ので、明治初年には帰国していたようである。『無錫錢氏宗譜』の記述によれば、銭子琴の最初の妻は同治己巳（一八六九）年六月十日に亡くなっているから、その前後に上海に戻ったに相違ない。

ところで、銭子琴はいつたい何によって生計を立てていたのであろうか。無錫在住の父親がそれなりの資産家で、生活には困らなかつたとも推測されるが、後年、上海東本願寺別院の僧侶岡崎正純が『支那在勤雜誌』明治十一（一八七八）年二月十一日（陰曆一月十日）条で、

二三日前から生徒の本多澄雲と本間実が風邪で床に臥し、病勢は危殆に及ぶという。そこで薄暮急速に銭子琴先生を呼んできて、診察をしてもらった。

と書いているので、銭子琴は医者であつたらしい¹²。

清代無錫の錢氏について研究した蔣明宏「清代無錫錢氏家族教育及其轉型述論——以嶽山派城中支、湖頭派七房橋支為例」¹³によれば、無錫では嶽山錢氏と湖頭錢氏が二大錢氏で、彼らは、大体は、基本的な儒教の教養を身に着けた後、家庭教師をしたり、あるいは小店舗を開いたりしていたが、中には漢方に通暁して医者となった者もいたという。銭子琴もその一人であり、長崎で岡田篁所と最も親しく交際したのは、同業同好ということで誼を通じたからであろう。銭子琴の二番目の妻朱氏は、銭子琴より十二歳若く、書を善くし、刺繡にも巧みであつた¹⁴という。その朱氏は上海で男子一人を生んだが、しかし早世したので、銭子琴の弟愷の二番目の子である炳魁を養子とした。炳魁は同治壬申（一八七二）年八月の生まれである。何歳で銭子琴の養子となつたのかわからないが、銭子琴が四十九歳で亡くなつた光緒九（一八八三、明治十六）年には、十一歳であつた。



【図4】 銭子琴の墓があった無錫の塚山（吼山）の遠景（平成30（2018）年12月撮影）

なお、銭子琴の父の名は萼（一八一五〜一八七三）、奉政大夫（正五品）を授けられた。萼には男子が三人おり、銭子琴はその長男である。¹⁵⁾

二 明治維新（一八六八）前後、長崎・上海

銭子琴が長崎に出かけた同治（一八六二〜一八七四）初年というのは、日本では幕末から明治維新の時期に相当する。その頃の銭子琴の様子を垣間見させてくれるのが、尾張藩の僧で後に儒者となった青木樹堂（可笑、孟純、一八二五〜一八八一）の漢詩である。青木は慶応三（一八六七）年七月に西国に向かって旅立ち、同年八月に長崎で銭子琴と出会った。青木の漢詩集『樹堂遺稿』¹⁶⁾には

寄清客銭子琴 清客銭子琴に寄す

觀光蜻蜓州尽 觀光す 蜻蜓 州尽くる辺り

蚤客鮫人摩肩踵 蚤客・鮫人 肩を摩してなまよぐさ踵し

互市三倍争射利 互市三倍 射利を争ひ

先王風化付潜然 先王の風化 潜然に付す

中有南京銭夫子 中に有り南京銭夫子

群鷄之中独鶴峙 群鷄の中 独鶴峙つ

目撃已見大國風 目撃已に見る大國の風

三千里外得知己 三千里外に知己を得

修稿先問文章訣 稿を修め先づ問ふ文章の訣

隔岸同觀峨眉月 岸を隔て同じく觀る峨眉の月

流光冷々不禁衣 流光冷々 衣を禁ぜず

吟賞一樣清徹骨 吟賞一樣 清く骨に徹す

婦懺在邇心忡忡 婦懺邇くにあり心忡忡

煙波浩渺路不通 煙波浩渺 路通ぜず

別後憑誰寄相憶 別後誰に憑りてか相憶を寄せん

商參天外仰飛鴻 商・參 天外飛鴻を仰ぐ

とある。青木が見た長崎には、漁師や海女が行き交い、商売人が金儲けに齷齪していて、前代の優れた君主の教化も、影をひそめてしまった。そのような中、一人銭子琴だけは群鷄中の白鳥、一見して大國の人の風格があった。青木は、長崎で同じ趣味を持つ銭子琴と出会い、文章の秘訣を問い、詩の応酬をして楽しいひと時を過ごした。

銭子琴は『樹堂遺稿』中の漢詩七首に評を加え、卷末では「蘊釀の功深く、雕斲の才大なり。中唐を瓣香す。故にその用筆は浅からず。丁卯（一八六七）八月、子琴錢懺読む。「蘊釀功深、雕斲才大、瓣香中唐、故其用筆不淺。丁卯八月、子琴錢懺読」と褒めている。

明治五（一八七二）年三月、長崎の岡田篁所が、松浦永寿と蘇州人湯韻梅とを連れて上海にやって来た。銭子琴は四月三日に城内虹橋頭の張宗衛内の自宅に岡田を招き、書を善くし、刺繍にも巧みであった妻とともに接待した。そ

してその日、錢子琴は岡田を城内西南隅の一粟庵に案内した。¹⁷一粟庵は明末に東閣大学士であった徐光啓の園地があつたところで、寧波の僧侶超竣が康熙七（一六六八）年に買い求めて庵とし、道光（一八二一～一八五〇）年間に拡張、林泉幽勝の地となつた。¹⁸

この頃錢子琴は、神奈川の漢詩人平塚梅花（名は真宝、一八〇九～一八九〇）と文通をしていた。平塚の『秋錦山房詩鈔』中巻¹⁹には、錢子琴の詩が二首収録されている。第一首は明治五（一八七二）年四月六日に、第二首は明治六年六月二十七日に平塚の手元に届いているが、両詩とも高い山（峻嶒）と気高い氣質（傲骨）とを詠んだものである。平塚梅花は浅草の浄土宗長円寺の住職であるが、幕末から横浜在住の清国人と交流をし、明治元年には横浜に移住した。『秋錦山房詩鈔』には、李星・葉松石・譚禹（崖甫）・支離子・半樵・夢梅・品梅・遊水・区齋觀（元少）・龔慎夫・勞荻裳（梅石）・梁秋甫などの名前が見える。²⁰錢子琴は、彼ら清国人の誰かを通じて、平塚梅花の存在を知つたのであろう。

なお、『無錫錢氏宗譜（庚寅本）』第四巻によれば、錢子琴は癸酉（一八七三）年に宗譜を纂修しているが、この仕事は父親夢との共同作業であつた。同書の夢の項目にも「癸酉纂修宗譜」と書かれているからである。父親夢は、「克く先志を承け、六代同居、嚴に子姪を課し、徳は郷里に浹し「克承先志、六代同居、嚴課子姪、徳浹郷里」という人物であつたが、この年の七月二十七日に没した。

三 明治九（一八七六）年、京都・近江八幡

明治九（一八七六）年秋冬の間、錢子琴は京都に出かけて暁翠楼に滞在した。京都の山田長左衛門（名は純、号は

子静)の漢詩集『枕上贖稿』²¹には銭子琴の題および丙子暮秋の跋があり、題は立冬前三日(十一月四日)に書かれている。銭子琴と山田長左衛門とがどのような関係であったのか未詳であるが、この漢詩集には銭子琴よりも早く七月に清国人葉松石(一八三九〜一九〇三)が跋文を認めているので、あるいは葉松石からの紹介があったのかもしれない。葉松石は前節に挙げた平塚梅花の『秋錦山房詩鈔』にも名に見える人物で、明治七(一八七四)年二月に来日し、三月に東京外国語学校漢語学教諭として雇われていた。²²

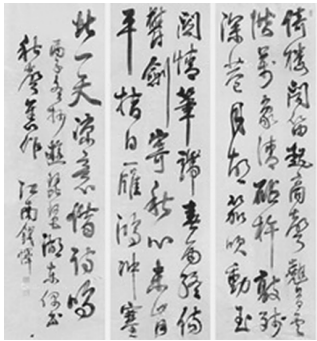
山田長左衛門の詩に題を書いた三日後の立冬(十一月七日)、銭子琴は、同じく京都の商人で、漢詩文に巧みであった神田信醇(名は久信、号は香巖、一八五四〜一九一八)の漢詩集『夕陽紅半楼小稿』に序文並びに読後筆を寄せ、全篇に互って丁寧な評語も加えている。それにはまた、神田が銭子琴を詠んだ左の詩「贈清客銭子琴」

相逢ひ半日詩を論じ、便ち超然俗羈を脱するを覺ゆ。文字因縁旧有るが如く、海外より新知を得るを喜ぶ。

も収録されている。²³ 神田の『夕陽紅半楼小稿』には、銭子琴以外に、菊池三溪・長榮三洲・江馬天江・山中静逸・岡本黄石・頼支峯・広瀬林外・安富深屋・如意山人鉄臣・宮原潜叟・市村水香・広瀬青村・石津灌園・大沼枕山・強堂市村水香等々の人物が評を加えている。

銭子琴が連泊していた暁翠楼は、工部省電信寮に勤めた後、博愛社創立に係わった原田隆造(号は西疇)の書齋の名という。²⁴ この暁翠楼には後に銭子の友人陳曼寿も厄介になることとなる。²⁵

ところで、京都に滞在していた銭子琴は、その後、琵琶湖を周遊し、自分の旧作を揮毫した(図5)²⁶。神田信醇の『夕陽紅半楼小稿』に評を加えて



【図5】 琵琶湖周遊時の銭子琴書

いる岡本黄石（半介、一八二二～一八九八）は旧彦根藩の家老、如意山人鉄臣（谷鉄臣、一八二二～一九〇五）も彦根藩士で医師であるから、あるいは彼らから誘われて琵琶湖周遊をしたのであろう。

そして銭子琴は近江八幡に立ち寄った。明治九年五月、近江八幡では八幡東学校の建設が決議され、十月に着工した。²⁷この東学校のために銭子琴は「徳門」の扁額を書き残している。そこには「丙子冬日適八幡東学校経始、書此子琴銭擘」と記されている。「経始」とは、「営建を開始する」、「経営を開始する」という意味であるが、東学校の開校は明治十年四月というから、ここでは建築に着工したことを指すのであろう。銭子琴がどのような経緯でこの額を書いたのか不明であるが、貴重な史料であるので、ここに写真を掲げておこう（図6、7）。



【図6】 白雲館（旧八幡東学校校舎）

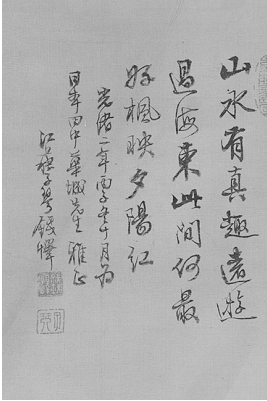
平成30（2018）年9月撮影。



【図7】 銭子琴題額「徳門」

平成30（2018）年9月撮影。

この前後、銭子琴は浪華の漢方医で漢詩人の田中華城（一八二五～一八八〇）のために、松村景文（二七七九～一八四三）が描いた「紅葉驟雨図」の幅に賛「山水有真趣、遠遊過海東、此間何最好、楓映夕陽紅」を施している（図8）。



【図8】 銭子琴賛、松村景文画「紅葉驟雨図」

左は、銭子琴賛の部分拡大。



【図9】 銭子琴書「春暉秋爽」

さらに、この年の冬、銭子琴は、京都の石津灌園（一八四三〜一八九一）のためにも「春暉秋爽」と揮毫している（図9）²⁹。石津は江戸で萩原西疇らに学び、明治八年太政官修史局に入ったが、まもなく辞職して生地 of 京都で教育と著述に専念していた³⁰。

四 明治十（一八七七）年、上海―上海東本願寺別院と銭子琴―

明治九（一八七六）年七月十三日、豊後妙法寺の住職である小栗栖香頂（一八三一〜一九〇五）は、浄土真宗を中国に布教をするため、谷了然・哲僧・順照・賢超らの僧と上海に来た。上海領事品川忠道に開教の申請をし、北京路に房屋を借りて浄土真宗上海別院を開設する場所とした。そして七月二十八日から八月十日まで、上海・武漢間にある寺院やキリスト教会などを見て回り、八月二十日に上海東本願寺別院の開宗式を挙行了³¹。

この開宗式に銭子琴が「儒者」の肩書で出席し、小栗栖と親しく交わった。小栗栖が病のために明治十（一八七七）年一月十六日に長崎に戻って療養すると、銭子琴は三月五日から三月十二日まで、長崎へ見舞いに出かけている³²。銭子琴にとって長崎は馴染みの土地であったとはいえ、前年の冬に京都や近江八幡に行ったばかりの銭子琴が、病氣見舞いのためにわざわざ長崎まで出かけている。銭子琴が小栗栖と相当に親密な間柄であったことが推測される。

なお、小栗栖は長崎で岡田恒庵の診察を受け、中風と見立てられたが、この恒庵は、銭子琴と親交があり、上海にも来たことのある岡田篁所の医号である。

明治十（一八七七）年八月四日（陰曆六月二十五日）から翌年五月まで、三等説教者兼四等教師として東本願寺上海別院に在勤した岡崎（岳崎）正純（一八三六〜一八八六）は、秋田・浄弘寺の生まれで、明治元（一八六八）年、越前国祐善寺に入寺して同寺を継ぎ、説教のかたわら『真宗説教』を編纂したほか、同別院内に設立された中国語学校の江蘇教校で日本人留学僧に真宗学を教授した。

岡崎が書き残した『支那在勤襟志』³⁴によれば、八月二十二日（陰曆七月十四日）に初めて銭子琴に会っている。そして銭子琴について、「該人者博学而善書且高行、異流俗之売字者流」と評している。この日以降、『支那在勤襟志』には九月二十一日（陰曆八月十五日）、九月二十四日（陰曆八月十八日）、九月三十日（陰曆八月二十四日）、十月八日（陰曆九月二日）、十月十二日（陰曆九月六日）、十月十三日（陰曆九月七日）、十月十四日（陰曆九月八日）、十月十七日（陰曆九月十一日）、十一月十九日（陰曆十月十五日）、十二月六日（陰曆十一月二日）、十二月十一日（陰曆十一月十一日）、十二月十四日（陰曆十一月十日）、明治十一年二月十一日（陰曆一月十日）、三月十二日（陰曆二月九日）、三月十七日（陰曆二月十四日）、三月二十日（陰曆二月十七日）、三月二十六日（陰曆二月二十三日）、三月三十一日（陰曆二月二十八日）、五月八日（陰曆四月七日）、五月二十二日（陰曆四月二十一日）に銭子琴の名が見え、わずかに九カ月ほどの間に、岡崎と銭子琴が実に頻繁に交流していることに驚かされる。記事の内容は、岡崎の詩文を銭子琴に評してもらい、また銭子琴に揮毫してもらおうというのが殆どである。

岡崎正純に少々遅れて上海に来た松本白華（号は西塘、一八三八〜一九二六）は、加賀松任の本誓寺に生まれ、明治五（一八七二）年に教部省に出仕して欧州宗教学事情視察に行き、明治六年帰国した。その後、明治十（一八七七）

年に東本願寺上海別院輪番に任じられ、同年九月四日に上海に来た。

松本は詩文に堪能で、上海に来てから毛祥麟（対山）の『墨余録』や齊玉溪（学裘）の『劫余詩選』を読み、上海に詩文の大家がいることを知った。おそらく岡崎正純あたりから、銭子琴を紹介されて、毛祥麟や齊玉溪のことに話が及び、これまで詠んだ自分の詩を上海の文人たちに批評してもらおうと考えた。

そしてまずは陳曼寿・蔣文席・王治梅・孫謫人・錢樸・曹叔培らに批評を仰ぎ、次にそれを銭子琴が浄写し、『西塘詩稿本』（松華堂半葉十行用箋、全三十二葉）と題して、銭子琴を介して毛祥麟と齊玉溪に送った。おそらくその一本と思われるものが、現在、蘇州図書館に所蔵されている。

蘇州図書館蔵『西塘詩稿本』の巻頭に「陳曼寿先生閩、謫人孫先生評、子琴錢先生評 朱字係錢先生評語」とあり、巻末には松本白華の次の跋文が載せられている。³⁷⁾

たまたま墨余録及び劫余詩選を読み、大江の南に毛・齊二先生あるを知る也。曄は東瀛の鄙人、少くして緇林に隠る。本朝更始の際に遭ひ、時事を妄言し、誤りて吏職に任ぜらる。筆硯は荒蕪し、旧業は廢たる。本年正月官を辞して滬に来たり、本願寺別院に勾当たり。近ごろ銭子琴君と往往談二先生に及び、曄景慕是れ極まれり。即ち人を介し、子琴君作る所の詩二卷、硯北に就正す。昔、蘇子嘗つて韓富二公に見え、終身榮と為す。茲に二先生年高く、学富めり。名一時に重く、今の韓・富也。曄何人ぞ、斯に敢へて狂妄此の如し。抑も説有り、鄙稿大雅の斧鉞を得ば、之を本国に送致し、儕輩をして今日の榮を知らしめんと。文字と文は東西無き也。故に瀆冒を忘れ、猥りに呈し、大方に笑ひを呈すると爾云ふ。

明治十年十二月

日本 松本曄再拜、伏して乞ふ。

対山毛先生 閣下

玉溪斉先生 閣下

裁正

「蘇子嘗見韓富二公」というのは、蘇東坡の弟蘇轍が、北宋の著名な政治家である韓琦と富弼の二人に会って光榮に感じたという故事であり、毛祥麟・齊玉溪は、韓琦・富弼に匹敵すると言っているのである。

この松本と同じ船で、支那布教事務掛として上海に來た北方心泉（蒙、一八五〇～一九〇五）は金沢・常福寺の住持である。³⁸岡崎の『支那在勤襟志』にも北方の名がたびたび見え、例えば明治十一（一八七八）年五月八日条には

北方蒙過予房、謂予曰、今日有怪事不樂、予聞其事曰蒙云、我曾請求錢子琴數紙揮毫、錢氏今揮得來、然瘦猿賊竊盜所藏二紙不與。以故心中憤懣云々。

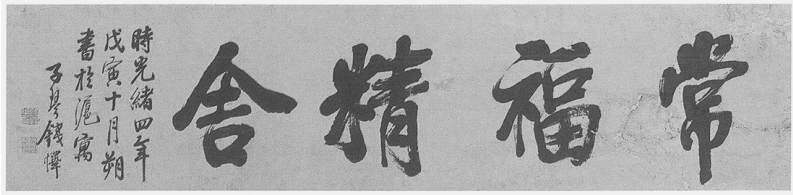
とある。「予聞其事曰蒙云」の個所はやや解し難いが、北方が錢子琴に揮毫を乞うたところ、「瘦猿賊」（ここでは盜癖のある一僧侶）がそのうちの二紙を盗んで返してくれず、憤懣やるかたないと言っているのである。

このように、東本願寺上海別院の僧侶たちは、錢子琴と親しく交際し、詩文を評閲してもらったり、揮毫をしてもらったりしていた。錢子琴は、光緒四（一八七八）年十月朔に「呉越王孫」の落款印のある「常福精舎」の額（**圖10**）、孫過庭「書譜」を臨書したもの（**圖11**）、それに「江干風紫雁声愁」云々の七言詩（**圖12**）を書いて北方に贈っている。³⁹

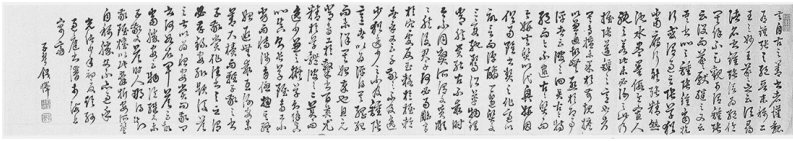
ところで、錢子琴と東本願寺上海別院との関係で、最も重要なことは、錢子琴が頼山陽の『日本外史』に評点を加えて、光緒五（一八七九）年に上海で出版したことである（**圖13**）。

錢子琴は序文で『日本外史』の特徴について

日本人は皆わが国の書物を読むが、私はまだ日本の書物を読んでいない。日本の歴史書を読もうとしても、崩し



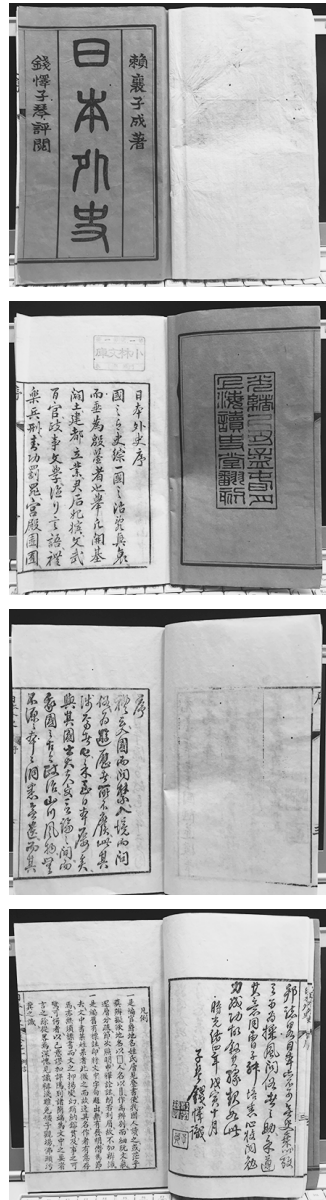
【図10】 銭子琴書「常福精舍」



【図11】 銭子琴臨書「書譜」



【図12】 銭子琴の七言詩



【図13】 銭子琴評閱『日本外史』

字が晦渋で、読み終わらないうちに眠たくなってしまう。その後、頼山陽の『日本外史』を得て読んでみると、全部で二十二巻、その中には、源平が日本全国を支配するようになって以来、陪臣が国命を執って天下を統括支配、その後英賢が崛起し、豪傑が奮起して、離合集散するに至るまで、八九百年の事蹟が漏れなく包括され、五畿六道の風土人情がはつきりと記されている。文章は非常に巧みで、思い通りに操り、叙事は簡潔で明らか、議論はすっきりと通り、褒貶も微かに顕れている。真にすぐれた歴史家の才があり、手本とすべき文章が満載されている。

と列挙、同好の人に読ませようと評を加え、芥玉溪からも、イギリスにはイギリス史、アメリカにはアメリカ史があるように、日本には日本史がなくてはならないと、出版を勧められたので、曹叔培の協力を得て出版するに至ったと述べている⁽¹⁾。

復旦大学で長く日中間係史を研究していた趙建民氏は、銭子琴の『日本外史』評閲の出版が中国人の日本認識の深化に役立ったことは疑いないと言っている。⁽⁴²⁾

ところで、川邊雄大「東本願寺上海別院の出版活動」⁽⁴³⁾によれば、石川県白山市立松任図書館白華文庫には「外史翻刻計算」と題する記録が残っており、それには、「預備、八百五十一円九十八錢六厘四毛」とあって、「一、四拾五円。齊玉谿・毛対山・銭子琴・曹叔培等へ依頼ニ付諸入費」「内訳、式拾円。齊玉谿序文。拾円、毛対山品物贈ル。拾五円、宴会等費張鼎功へ貸ス」とか、「一、五拾円。銭子琴・曹叔培雇薪水費送ス」とか、各巻ごとの必要経費などが詳細に記録されているという。この「外史翻刻計算」なる史料によると、『日本外史』出版の費用は東本願寺が出し、また銭子琴・齊玉谿・毛祥麟・曹叔培たちには謝金も渡されていたことが明らかである。東本願寺別院の学師の月給が二十円、教師は十円というから、齊玉谿の序文が二十円というのは、高額である。

岡崎正純の『支那在勤禪志』の明治十年十月十七日（陰曆九月十一日）条に「薄暮銭子琴到余前、城老因輪的之請蒞其席。蓋別院有外史翻刻之事件也」とあり、同年十二月十一日（陰曆十一月十一日）条に「銭子琴先生至（中略）外史評点及毛対山序文成」とあるので、東本願寺別院が『日本外史』翻刻の当事者であったことは疑いない。しかし、出版された『日本外史評』には、東本願寺の名は一切見えない。これはいったいどう理解したらいいのだろうか。

川邊雄大氏の前掲「東本願寺上海別院の出版活動」には、当時、欧米各国の宣教師は、「天津条約」第八条第十三条によって、中国国内にキリスト教を宣教する権利を得ていたが、一八七三年に締結された「日清修好条規」には、日本の僧侶が布教をする権利は規定されていなかったから、『日本外史』出版から東本願寺の名前は一切、削除したのだろうと書かれている。

なお、『支那在勤禪志』には毛対山（祥麟）の序文も出来上がったとあるが、出版された『日本外史』には、その

序文はない。これまたどういう事情によるのか、未詳である⁽⁴⁾。

五 明治十（一八七七）年、上海―曾根俊虎・副島種臣らと銭子琴―

海軍中尉曾根俊虎（一八四七―一九一〇）は、明治九（一八七六）年二月に上海に来て、海軍省が浦東地区に持っていた敷地内に住み、諜報活動に従事していた。曾根は詩文にも造詣が深く、嘯雲の号も持つ人物であり、上海に来る前、既に北京で張滋昉（一八三九―一九〇〇）から北京官話を教わっていた。

その曾根は、元米沢藩の儒者である中川英右（雪堂）の『雪堂詩鈔』の稿本を持参した。曾根と中川との関係は未詳であるが、⁽⁵⁾中川の古体詩について、明治十（一八七七）年七月、張滋昉や銭子琴に評閲を仰いだのである。曾根と銭子琴は、共に東本願寺の開宗式にも出席しており、知り合いであった。銭子琴は序文で「丁丑七月、友人曾根君、先生の詩稿一冊を持ち、先生の命を以て、余に点定を囑す」「丁丑七月、友人曾根君持先生詩稿一冊、以先生之命囑余点定」と書き、曾根を「友人」と言っている。

この明治十八（一八八五）年三月に出版された『雪堂詩鈔』（聚遠楼蔵版）は、巻頭に三条実美・上杉斉憲の題、細川潤次郎・重野安繹・張滋昉・銭子琴の序、門人柿崎徳の題、巻末に副島種臣・宮島誠一郎・何如璋・黃遵憲ら錚々たる人物の跋文がある。

銭子琴が曾根と親しくなった頃、明治九（一八七六）年十月、日本から元外務卿の副島種臣が上海にやってきた。副島は日本人経営の旅館田代屋に宿泊し、上海総領事の品川忠道、東本願寺別院の小栗栖香頂らと会った。そしておそらく旧知の曾根俊虎とも会い、その後、天津・杭州・蘇州などへ旅行をした。その後もう一度、荊州・漢口などへ

と旅行をし、旅行から戻った明治十（一八七七）年三月に、副島は旅行中に詠んだ漢詩を錢子琴に見せた。⁴⁶

錢子琴は副島の詩集を読んだ後、副島の漢詩は李白や杜甫の詩のようだと褒めた手紙を送ると同時に、「題日本副島欽使詩稿後」と題する長詩も送った。⁴⁷この錢子琴の詩に對して、副島も韻を次いだ長詩を詠んでいる。⁴⁸錢子琴が詩経を引き、また季札や子産の故事を持ち出して、副島の詩を論評したのに對して、副島は錢子琴が古典によく通じた人物であると感じ、「錢君博治士」と褒めている。

この後、両者は親しく交わるようになった。副島が帰国するに際しての詩会で、錢子琴が詩を送ると、副島は、錢子琴の辞令の何と厚いことか、錢子琴の情はまさに「折楊柳」の諺どおり細やかで、忘れがたいと答えた。⁴⁹

六 明治十一（一八七八）年、上海—吉岡拝山と錢子琴—

明治十一（一八七八）年二月頃、筑前大宰府の吉岡拝山（一八四六—一九一五）が上海に来た。吉岡は明治維新後東京に出て、明治四（一八七二）年太政官記録編輯局に勤めながら画家を目指していたが、同年七月、出勤途中に大風雨に遭遇して、倒れた家屋の下敷きになり、右腕を切断する大手術を受けた。二十六歳の時である。吉岡は、自分の右腕の骨で筆を作り（図14）、それを携えて、画業とくに南画の制作に励んだ。中国に来てからもその骨筆を肌身離さず、上海・揚州・蘇州と漫遊し、多くの文人たちと交流した。⁵⁰

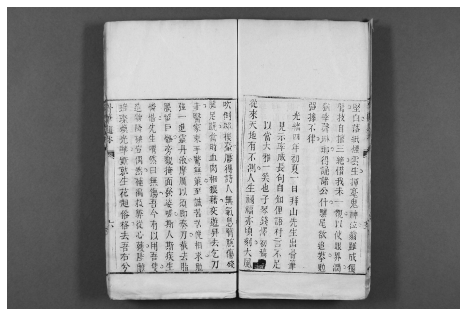
中国の文人たちは、この珍しい骨筆を見るため、また吉岡という風変わりな人物にも興味をもって、こぞって交流、思い思いに詩文を応酬し、それを『骨筆題詠』と題して纏め、錢子琴も一文を寄せている（図15）。

次に吉岡は、上海・龍華寺・鎮江・揚州・邗江・史忠正墓・蕭孝子祠・天寧寺など江南地方を遊歴して『江南游



▲若狭の骨で作った筆

【図14】 吉嗣拝山の骨筆



【図15】 『骨筆題詠』に描かれた吉嗣拝山と銭子琴の文章

草』に纏め、銭子琴は跋文を書いている。さらに、小西門・陸家浜・虎丘・楓橋・寒山寺・五龍橋・蘇堤・岳王廟・
 韜光寺・林処士墓・雲林寺・西湖などにも遊び、吉嗣は『江南游草後』を作った。これにもまた銭子琴は読後感を寄
 せた。

吉嗣はこれら三種の詩集を纏めて『拝山奚囊』と題し、上海で出版^①、これに芥玉溪と北方心泉が序文を書いている。
 ただし、北方の序文を筆写したのは銭子琴である。

この『拝山奚囊』のうち、『江南游草』『江南游草後』の二種の上欄には評が加えられているが、これは銭子琴の評

に違いない。何となれば、『明治詩文』第三十集（明治十二年六月出版）には吉嗣の詩「登虎阜」及び錢子琴の評が、同じく第三十四集（明治十二年十月出版）には吉嗣の詩「去古吳舟中作」と錢子琴の評が掲載されているが、これらは『江南游草後』の詩及び上欄の評とまったく同一だからである。

それはそれとして、序文を書いた北方心泉は先に紹介したように、東本願寺上海別院の僧侶であり、錢子琴とも知り合いであった。従って錢子琴が吉嗣を知ったのは、北方を介してであったかも知れない。

七 明治十二（一八七九）年、長崎・東京―漢詩人との交流―

明治十二（一八七九）年の春、錢子琴は長崎を訪れた。長崎では三月十五日から六月十二日までの約百日間、長崎博覧会が開催されており、その見物のためであったと思われるが、一緒に行った画家たちと会場で絵を画いている。その様子は、上海で出されていた『申報』一八七九（明治十二）年五月三日号にも掲載されている。

長崎博覧会近状

○長崎来信云、自開会場以来、先則游觀者毎日約有一千五百人或千人、不等。近則不過二三百人矣。会首每延水師兵入会場、同奏西樂、或令歌姬吹彈、以助雅典。前次礼拝日又請中国画家胡二梅・王冶梅・錢子琴・王鶴園諸君、到場成画山水、或画花卉翎毛、一時各擅所長、觀者皆嘖嘖称道云。

『申報』にその名が掲載されているので、錢子琴も当時それなりに著名であったことが知られる。明治十三（一八八〇）年に編纂された『長崎古今学芸書画博覧』（西道仙海人艸舎藏版、明治十三年、新町活版製造所）には、「近時留寓清国諸家」十四名のうち、錢子琴も王冶梅とともに列挙されている。

銭子琴は暫く長崎に滞在し、旧知の岡田篁所その他の文人たちと交流を深めた。五月二十三日、佐賀の谷口藍田が嬉野から長崎にやって来て、岡田篁所のもと投宿した。『藍田谷口先生全集』⁵³所引「韓氏日歴」（明治十二年五月）には

二十五日、清人張鼎昉・銭子琴来訪。筆話終日、頗入雅境。亦出主人好意也。

二十七日、岡田嘯雲・大津山晉齋来訪。張鼎昉・銭子琴・小曾根晨太郎乾堂長男亦至。筆話有興。

銭懌云、成富清風兄在上海、旦夕問話。每道及先生學問文章、心窃慕之。懌字子琴。

余云、僕年少不如人、況今老病、無一可取。往年觀君贈清風文章並書、俱佳。

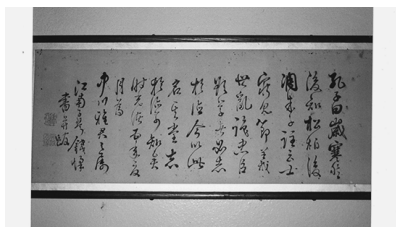
銭懌云、敷衍成章、不堪入目。今日思之、実深慙愧。還望先生有以教之則幸甚。

余贈詩云、「彩毫揮去起雲烟。早有芳名遠近傳。不怪相逢如旧識。神交已在十年前」。

銭懌云、伏誦尊作、勉強奉和請教、恨才薄不能驟成。竟有大巫在座小巫慌之概。

とある。これによれば、岡田篁所が氣を利かせて、銭子琴と張滋昉を谷口藍田に紹介した。銭子琴は既に上海で成富清風（穆齋、一八三九〜一八八〇）からたびたび谷口藍田の學問文章がすぐれていることを聞かされていた。成富清風は、谷口藍田の弟子である。他方、谷口藍田も既に銭子琴が成富に贈った文章並びに書を見ており、銭子琴のことを知っていた。

銭子琴はまた長崎滞在中に、日本人に詩や書を教えてもいたらしい。その一人に、愛知県知多郡東浦町の中川南巖（一八五五〜一九一七）がいる。中川は、長崎に遊學して岡田篁所・守山湘颿・清原無曆・成瀬石癡らと交流を重ねるとともに、銭子琴に書や画を教わり、帰郷して書家として活動、多数の門人を養成した。中川の手元には銭子琴が光緒五（一八七九）年夏に書いた「歲寒堂」の書幅が二種残されており、一つには「時光緒五年孟夏之月、於長崎書



【図16】 銭子琴書「歳寒堂」(上)と跋文(左)

為中川雅君之属」の跋、今一つには

孔子曰、歳寒然後知松柏後凋。朱子註云、士窮見節義、世乱識忠臣、欲学者必志於德。今以此名其堂、志於德可知矣。時光緒五年夏月、為中川雅君之属、江南子琴銭懌書并跋。

の跋がある(【図16】)。「歳寒堂」は中川の書齋の名である。⁽³⁴⁾

中川南巖の手元には、銭子琴が題字を書いた書画帖も残されており、その巻頭には次のような銭子琴書の漢詩が載せられている(【図17】)。

人間万事類囲棋 人間万事 囲棋に類す

一勝一敗更楽悲 一勝一敗 楽と悲とかわる

正是功名名遂日 正に是れ功成り 名遂ぐる日

況茲世泰歳豊時 況んや茲に 世泰らかに歳豊なる時

登山涉水方為得 登山涉水 方に得たりと為す

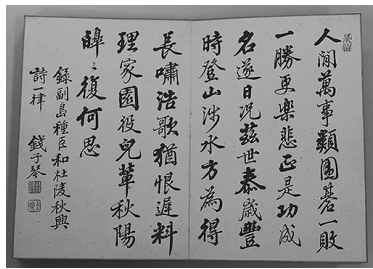
長嘯浩歌猶恨遲 長嘯浩歌 猶ほ遅しと恨む

料理家園児輩在 料理家園 児輩在り

秋陽暉暉復何思 秋陽暉暉 復た何をか思はん

録副島種臣和杜陵秋興詩一律 銭子琴

銭子琴が「録副島種臣和杜陵秋興詩一律」と書いているように、この詩は副島種臣が杜甫の秋興八首に和した詩の一首であるが、そもそも副島種臣が



【図17】 銭子琴書副島種臣漢詩

この詩を詠んだのは、明治十（一八七七）年陰暦八月のことで、上海在住の文人芥玉溪と唱和したものであった。その折に銭子琴も同席したのか、それとも後で副島の詩を見せてもらったのかは不明であるが、銭子琴は副島の詩を気に入って、誦んじていたのであろう。

さて、銭子琴は、長崎博覧会を観た後、東京へ行った。『讀賣新聞』明治十二（一八七九）年七月二十九日号に、次の記事がある。

銭憚字ハ子琴と云ふ支那人が一兩日前、横浜へ東京へ着しましたが、同氏ハ先年長崎表まで来り、日本の名山勝水を遍く遊歴せんと志ざせしが、故ありて果さずして帰国され、此般再遊なるが、昨日弊社の加藤九郎の寓居を訪ひ来り、詩などを賦し、席上揮毫をされしを見ましたが、中中詩書とも見事であります。現今竹川町の越前屋に寄寓されるゆゑ、書を望む方ハ行ッて乞ひ給へ。先年副島公が支那に使ひされ、上海に滞留の節ハ毎に同氏を招き、愛顧されたりと云ふ。

この新聞記事に見えるように、副島と銭子琴はかつて上海で知り合っていたので、東京に来た銭子琴は、八月初旬、副島を訪ねた。副島は、清国漫遊中の詩集を銭子琴に見せ、評点を加えてもらった。それが本稿冒頭に掲げた『詩草』である。

その後銭子琴は、明治十二年十二月二十六日、長崎に建てられた「振遠隊戦士遺髮碑」の碑文を書いている。振遠隊というのは、戊辰戦争に際して明治元（一八六八）年四月、政府軍が旧幕府軍を追討するために長崎で集めた兵隊であって、三百十八名の兵士が奥羽地方に出陣した。その兵隊を集めるために政府から派遣されて長崎に行ったのは



【図18】 長崎市佐古・梅香崎墳墓「振遠隊戦士遺髪碑」
(右)「子琴銭懔書」(左)

副島種臣であった。

振遠隊は約五カ月の戦闘で、戦死者十三名、病死四名を出したため、明治二（一八六七）年十二月、大楠神社の傍らに振遠隊戦病死者の招魂場を選定、十二月二十七日に遺髪を葬った。

そして明治十二（一八七九）年十二月二十六日、振遠隊の元軍曹であった吉村元善が元軍監の石田英吉らと謀って、招魂場内西北隅に振遠隊戦士遺髪碑を建て、その碑文を谷口藍田（中秋）が撰び、銭子琴が書した（図18）。谷口藍田は佐賀出身であるが、幕末長崎に滞在して漢詩文の塾を開いており、吉村元善は谷口の門人であった。⁵⁷ 銭子琴が書を担当したのは、谷口藍田が依頼したからであろう。⁵⁸

八 晩年の銭子琴

銭子琴がいつまで日本に滞在したのか、日本でのどのような生活をしていたのかについては、必ずしも明らかではない。『明治詩文』第二十五集（明治十二年一月）、第二

十九集（明治十二年五月）、第四十四集（明治十三年四月）掲載の成富清風の詩に錢子琴の評がある。既に言及したように、錢子琴と成富は旧知の間柄であった。この当時、成富はコルサコフ（樺太）の領事であるが、一時東京に戻っており、明治十二（一八七九）年六月四日には依願免官となった。⁽⁵⁹⁾『明治詩文』所載の詩は、成富が東京に戻っていた時のものであろう。

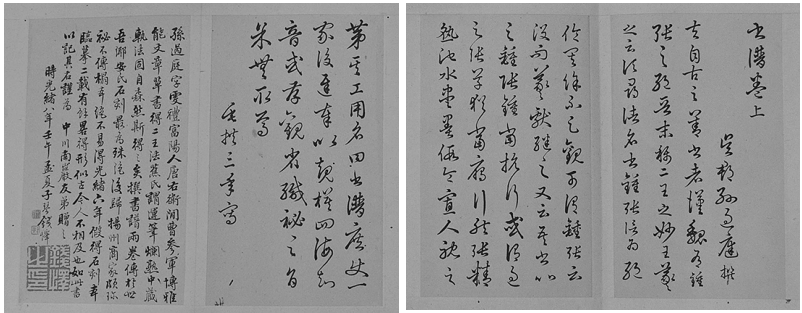
明治十三（一八八〇）年三月、曾根俊虎が中心になって興亜会が結成されると、錢子琴も入会した。⁽⁶¹⁾興亜会は、欧米勢力の東漸に対抗して、日中が協力するために設立された。「興亜会設立緒言」には、欧米列強が強いのは互いに言語が通じているからであるが、日本人は欧米語には通じていても中国語には殆ど通じていないので、まずは中国語学校を開設して言語が通じるようにしたいと書かれている。⁽⁶²⁾この興亜会に錢子琴も入会したが、どの程度の関り方をしたのか不明である。「本会報告第四集発兌後人会人姓名」⁽⁶³⁾の欄に錢子琴の名がある。

この他、明治十五（一八八二、光緒八）年孟夏、錢子琴は長崎の岡田篁所を介して、愛知の中川南巖に孫過庭の「書譜」を臨書して贈り、⁽⁶⁴⁾巻末に次の跋文を書き記している（【図19】）。

孫過庭、字は虔礼。富陽の人。唐の右衛門曹參軍。博雅文章を能くし、草書は二王の法を得。蕉氏謂はく、運筆爛熟、中に軌法を蔵し、固より自ら森然、斯ちこれを得たり。書譜両卷を撰び世に伝ふ、と。吾が郷、安石石刻を最も殊と為す。絶後揚州の商家に帰し、頗る珍秘して伝へず。榻本も絶えて得易からず。光緒六年仮に石刻本を得て、臨摹二載有余、略々形の古に似ることを得るも、今人、此の如きの書に相及ばざるなり。以て記す。其れ右、謹んで中川南巖友弟の為にこれを贈る。

時に光緒八年壬午孟夏、子琴錢擇

「孫過庭。字虔礼。富陽人。唐右衛門曹參軍。博雅能文章。草書得二王法。蕉氏謂。運筆爛熟。中巖軌法、固



【図19】 銭子琴臨書「書譜」

書譜卷上
 望於此之應排
 去自古之書也者僅觀其譜
 張之於吾未極二王之妙王蒙
 之云以吾法名古譜張之於

竹石信不之觀可月轉張云
 波而氣歇雖之又云年當心
 之轉張譜當核り或得之
 之法字形當存り於此轉
 熟池水事量伍之宣人決之

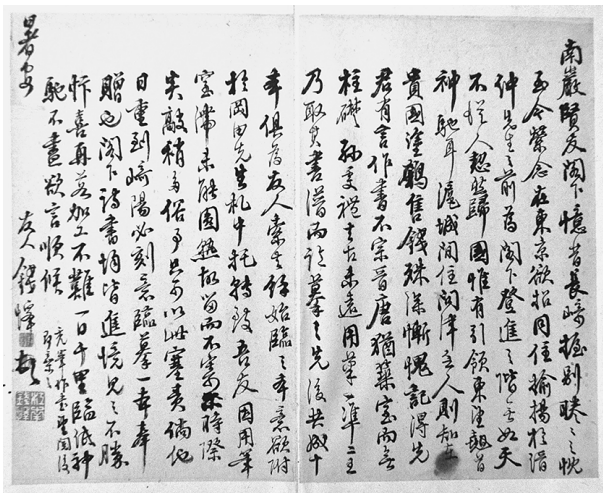
第工用名田也勝之故一
 家後逢存の我核四海の
 音式存の親者職秘之名
 朱世取焉
 後村三幸書

孫逸匠字東嶺富陽人居右衛門督參軍博雅
 能文華草書稱二王法草小楷遒率細盡中藏
 無法固自森然斯得矣操書端兩卷偏於心
 吾鄉安氏石刻最奇珠院後孫揚州商發願
 秘不傳稱并院不馬得先結六年後得石刻幸
 既蒙予戲有狂言得形似今人不相及如也
 以記其石確也 中川南巖友來贈
 時光緒八年壬午孟夏子琴錢擇

自森然、斯得之矣。撰書譜兩卷傳於世。吾鄉安氏石刻最為殊。絕後帰揚州商家。頗珍秘不伝。榻本絶不易得。光緒六年仮得石刻本。臨摹二載有餘。略得形似古。今人不相及也如此書。以記。其右、謹為 中川南巖友弟贈之。時光緒八年壬午孟夏子琴錢擇」

また銭子琴は、「書譜」を贈ることにした経緯を記した手紙も書いている（図20）。その手紙は、銭子琴と中川南巖との関係がよくわかり、日本滞在中の銭子

の様子の一端も窺うことが出来る貴重なもので、次に引用しておこう。
 南巖賢友閣下、長崎の握手の別れを憶昔すれば、瞻々の忱、今に至るも縈念す。東京に在り招きて同じく住み、縉紳先生の前に揄揚し、閣下の登進の階と為らんと欲するも、天の人に従はざるがごとし。忽然と帰国し、惟だ引領東望し、翹首神馳するのみ。滬城間に住して主人に問津すれば則ち貴国に在りて塗鴉售銭するを知り、殊に深く慚愧せん。記し得たり、先君言有り、書を作し晋唐を宗とせざれば、猶ほ室を築きて柱礎無きが如し。孫虔礼は古を去ること未だ遠からず、用筆は一に二王に準ずと。乃ちその書譜を取りてこれを臨摹し、先後共に十本を成す。俱に友人の索のためなり。夫れ余の始めこれを臨するの本意は、岡田先生の札中に附し、托転、吾が友に致さんと欲するなり。因て用筆窒滞、未だ能く円熟せず。故に留めて寄せざるなり。爾るに時際炎敲、稍や俗事多く、只だ此を以て責めを塞ぐべし。倘し他日重ね



【図20】 銭子琴の中川南巖宛書翰

て崎陽に到らば、必ず刻意一本を臨摹し、贈り奉るなり。
閣下は詩書均しく皆進境これを見る。忬喜に勝へず。再び
若し加工すれば、一日千里、臨低神馳も難からず。言はん
と欲するを尽さず。順候。(秃筆にて書を作す。望むらく
は閱後即ちこれを棄てんことを。)

暑安
友人錢懔 頓首

〔南巖賢友閣下。憶昔長崎握手別。睽々之忱、至今縈念。
在東京欲招同住、揄揚於縉紳先生之前、為閣下登進之
階矣。如天不從人、忽然歸國、惟有引領東望、翹首神
馳耳。瀨城間住問津主人則知在貴國塗鴉售錢、殊深慚
愧。記得先君有言、作書不宗晉唐、猶築室而無柱礎。
孫虔札去古未遠、用筆一準二王。乃取其書譜而臨摹之、
先後共成十本。俱為友人索。夫余始臨之本意、欲附於
岡田先生札中托轉致吾友、因用筆窒滯、未能円熟、故
留而不寄。爾時際炎敲、稍多俗事、只可以此塞責、倘
他日重到崎陽、必刻意臨摹一本、奉贈也。閣下詩書均
皆進境見之。不勝忬喜、再若加工、不難一日千里、臨
低神馳。不尽。欲言順候。秃筆作書。望閱後即棄之。〕

暑安、友人錢擘、頓首」

右の史料によつて、明治十五（一八八二）年夏、錢子琴がまだ日本に滞在していたことが判明する。明治十二年に長崎で中川南巖と別れた錢子琴は、中川を東京に招いて指導し、高位高官に紹介して、中川を出世させようと考えていた。しかし明治十五年、急遽帰国することになったため、「書譜」を臨書して贈ったのである。

錢子琴は明治十二年から三年間、日本に滞在していたが、この時に、書や刺繍に巧みな後妻朱氏を同伴していたのかどうか定かではない。二人の間には上海で生まれた子供がいたが、早世した。明治十五年当時、錢子琴は四十八歳、妻は三十三歳であるから、あるいは養子を取るために帰国したのかもしれない。『無錫錢氏宗譜（庚寅本）』第四巻によると、錢子琴は弟愷の次子炳魁を養子としている。炳魁は同治壬申（一八七二）年八月八日の生まれ、明治十五年当時十歳になっていた。

ところが帰国後、一年も経たないうちに、光緒癸未（一八八三、明治十六）年三月十七日、錢子琴は没した。岡鹿門の『航滬日記』明治十七（一八八四）年六月八日（陰曆五月十五日）条に⁶⁵

一有錢子琴所評外史。余曾見子琴。筆話不成語。吟香曰。外史評成其師齊学裘之手。子琴三年前死。其妻無可食。屢來乞憐。

とあつて、明治十七年の三年前すなわち明治十四年に錢子琴が死去したと記しているが、岸田もしくは岡の記憶違いということになる。また本文で明らかにしたように、『日本外史評』が錢子琴の師匠の齊学裘の手になったという記述も、不正確である。

明治十六（一八八三）年、錢子琴の妻が錢子琴の訃報を副島種臣のもとに知らせて来た。副島は「次韻。酬愛月女史錢氏」と題する詩を残しているので、錢子琴の妻は名を愛月と称したことがわかる。副島は

説聞行踪長緑蕪 説き聞く行踪 長緑蕪

素娥憑弔為誰吁 素娥 憑弔 誰が為にか吁く

昔吾立馬呉山頂 昔吾れ馬を立つ呉山の頂

東望江潮西望湖 東に江潮を望み 西に湖を望む

と詠み、さらに同じ韻で「再用原韻。哀錢氏之訃」も詠んだ。⁶⁶

有美堂中蘭蕙蕪 有美堂中 蘭蕙蕪

錢君遺業足長吁 錢君の遺業 長吁に足る

美人昨夜驚吾夢 美人 昨夜 吾が夢を驚かす

星大青燐落碧湖 星大 青燐 碧湖に落つ

素娥は夫后羿から不死の薬を盗んで月に逃れ、一人ぼっちで住んでいる嫦娥。有美堂は宋の時代一〇五七年に呉山に建てられた堂。愛月は夫錢子琴の訃報と共に、副島が上海で親しく交際した毛対山（祥麟）や齊玉溪も同年中に亡くなったことを伝えて来た。そこで副島は、「清夜弔対山毛先生。玉谿齊先生。錢君子琴。皆以昨年長逝。子琴有妻。為告訃」で

清夜懷人故鬼多 清夜 人を懐かしむ 故鬼多し

対山文采玉谿歌 対山は文采 玉谿は歌

一生磊落錢君子 一生磊落 錢君子

独有臨園月裡娥 独り有り 園を望む 月裡の娥

と詠んで、知人の詩を悲しんだ。⁶⁷「月裡の娥」とは錢子琴の妻愛月氏ではなく、副島自身のことであろう。⁶⁸

尾張の中川南巖も銭子琴の死を知り、「追憶先師銭子琴先生」と題する次の詩を残している。⁽⁸⁹⁾

僊遊去不還 僊遊 去りて還らず

追憶涙漣漣 追憶 涙漣漣

身朽名無朽 身朽るも 名朽るなし

書留天地間 書き留む 天地の間

おわりに

銭子琴は幕末から明治維新直後までに五回、その後、明治九年秋冬の間、明治十年三月、明治十二年春から明治十五年夏まで、本稿で明らかになっただけでも都合八回来日し、最晩年は四年間、日本に滞在していたと思われる。当時としては、相当の知日家であった。

当初、太平天国の乱を逃れて長崎にやってきた銭子琴は、東海の孤島日本に、漢詩や書に秀でた人物がたくさん存在し、しかも中国の古典に通じている文人が大勢いることを知って、驚いたに相違ない。しかも中国よりも先に開国し、西洋文明を盛んに吸収していることを知って、日本とはどのような国なのか、実際に見聞してみたいと考えたのであろう。

長崎、京都、東京と観光して回った銭子琴は、行く先々で文人たちと詩文の応酬をし、詩や書の指導もしたり、あるいは頼山陽著『日本外史』の評閱本を出版することによって、中国人の日本理解を深めたりした。

銭子琴最晩年の動向が今一つ明らかでないのが残念であるが、しかし、本稿で明らかになっただけでも、銭子琴の

「遺業」は長吁するに足ると言つてよからう。

(附記) 本稿は、二〇一七年から二〇一八年にかけて、中国の幾つかの大学で講演し、『日語学習と研究』(対外経済貿易大学主弁)に投稿した原稿に加筆したものである。

(謝辞) 本稿を作成するにあたって、快く史料閲覧の便宜を図っていただき、あるいは写真掲載を許可していただいた蘇州図書館・無錫図書館・愛知県知多郡東浦町郷土資料館・白山市立図書館・金沢市教育委員会文化財保護課・常福寺・近江八幡市役所・筑紫野市歴史博物館の各機関、史料収集に協力を惜しまれなかつた雲藤等・星原大輔・張天恩・古川英文・石魯豫の諸君に厚く御礼申し上げる。

注

- (1) 当時上海には約五十名の日本人が在住していたという(高綱博文・陳祖恩「上海日本人居留民関係年表(明治編)」『史林』上海社会科学院出版社、一九九五年第一期)。
- (2) 副島が最終的に帰国したのは、明治十一年一月五日(齋藤洋子「史料紹介 副島種臣の航海免状返納届」『佐賀県立佐賀城本丸歴史館研究紀要』第一二号、四一〜四二頁、二〇一七年三月)。
- (3) 中国滞在中の副島の動向については、島善高「副島種臣の清国漫遊」(『佐賀県立佐賀城本丸歴史館研究紀要』第一二号、二七〜四〇頁、二〇一七年三月)参照。写真は故草森紳一氏蔵。
- (4) 島善高編『副島種臣全集』(慧文社、二〇〇四年十二月)第一卷、二七六頁。
- (5) 東亜同文会編『対支回顧録』(原書房復刊、一九六八年)下巻、七六〜七七頁。

- (6) 『档案与史学』（上海市档案馆、二〇〇二年第六期）。
- (7) 岡田篁所『滬呉日記』（発行人・長崎県長崎市引地町 岡田恒庵、一八九一年二月）の序文「送岡田篁所先生婦日本序、同治壬申清和月 梁溪子琴錢懌拜稿」。
- (8) 全十五卷（私家版、二〇一〇年）。引用箇所は、第四卷、二五八頁～二六二頁。
- (9) 「在通往無錫的路上、遍地荒蕪、荆草漫生（中略）沿途布滿了数不清的白骨骷髏和半腐的尸體、使人望而生畏。這里沒有做買賣的船隻、商業絕迹、無錫已成為一片廢墟。」〔英〕哈喇著、王維周訳『太平天国革命親歷記』第二三章（中華書局、一九六一年十二月）の拙訳。
- (10) 前掲注7『滬呉日記』一一葉、明治五年三月十六日条。
- (11) 前掲注7『滬呉日記』六～八葉、「送岡田篁所先生婦日本序」。
- (12) 「從兩三日前生徒本多澄雲・本間実臥于風邪、聞、目今病勢及危殆。薄暮急速聘錢子琴先生來乞診」。岡崎正純『支那在勤雜志』は、柏原祐泉編『真宗史料集成第十一卷 維新期の真宗』（同朋舎、一九七五年七月）に収録されている。
- (13) 華東師範大学編『歴史教学問題』（二〇一四年第五期）。
- (14) 前掲注7『滬呉日記』三三～三四葉、明治五年四月二日条。
- (15) 前掲注8『無錫錢氏宗譜（庚寅本）』第四卷。錢子琴の弟愷の曾孫錢五九氏によると、吼山にあった錢子琴の墓は、道路建設のために撤去された由（平成三十年十二月二十四日面談）。
- (16) 乾坤二冊（永井久一郎、一八八八年一月出版）。
- (17) 前掲注7『滬呉日記』三三～三四葉、明治五年四月二日条。
- (18) <http://www.shiong.gov.cn/node2/node4/node2249/nanshi/node43774/node43791/node43793/userobject1a29526.html>。
- (19) 萬青堂刊、一八八二年四月。
- (20) 平塚梅花については、石井光太郎「平塚梅花のことども」（『神奈川文化』一九四〇年四月号、神奈川文化研究会）、石橋正子

- 「資料紹介『秋錦山房詩鈔』——平塚梅花と中国人たち」(『郷土神奈川』十四、神奈川県立図書館、一九八四年三月)、増田恒男「保土ヶ谷宿をめぐる文芸と文人たち——軽(莉)部長堅とその周辺」(『大倉山論集』六一、九三〜一三五頁、大倉精神文化研究所、二〇一三年三月) 参照。
- (21) 著者并出版人 上京区第三十区八幡町四二六番地 山田長左衛門、一八七八年一月九日出版。 一八九八年一月九日出版。
- (22) 「清人葉松石東京語学校へ雇入結約届」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.A01100066800、公文録・明治七年・第百六十八卷 (国立公文書館)。
- (23) 早稲田大学図書館蔵『夕陽紅半楼小稿』一五葉。「相逢半日只論詩、便覺超然脫俗羈。文字因縁如有旧、喜從海外得新知」。
- (24) 日野俊彦「陳曼寿と日本の漢詩人との交流について」(『成蹊国文』四八、五七〜七一頁、成蹊大学文学部日本文学科研究室、二〇一五年三月)。
- (25) 小野長愿(湖山)「消閑集附録」庚辰(一八八〇)四月二十三日条以下を参照(小野長愿『湖山消閑集』游馬吟社、一八八一年三月)。
- (26) 写真は中国のサイト「購網コム」にアップされていたもの。
- (27) 「東学校の誕生記」(近江八幡市「白雲館」ワークシートNo.1-1)。
- (28) <http://www.gouwu.jp.com/jweb/daipai/product/d297017108>。
- (29) 中国のオークションサイト「卓克拍賣頻道」<http://3gzhuokearts.com/html/auction/art/detail/1753/1/28562672.htm>。
- (30) 名は賢勤、発。字は子節、士儉。通称は発三郎。著作に『近事紀略』『古今勤王伝略』など。「日本人名大辞典」[Japanknowledge] <https://japanknowledge-com.ez.wul.waseda.ac.jp>。
- (31) 曲曉範「日本仏教徒小栗栖香頂与近代中日文化交流(一八七三〜一八七六)」(王建朗・楽景河主編『近代中国・政治与外交』上巻、社会科学文献出版社、二〇一〇年八月)。
- (32) 草森紳一「薔薇香處——副島種臣の中国漫遊(一三三二)」(『文學界』五六(九)、文藝春秋、二〇〇二年九月)。

- (33) 川邊雄大「明治期における東本願寺の清国布教について―松本白華・北方心泉を中心に―」（篠原啓方ほか編『文化交渉による変容の諸相』関西大学文化交渉学教育研究拠点（ICCS）、二〇一〇年三月）。
- (34) 前掲注12岡崎正純『支那在勤雑志』。
- (35) 川邊雄大・町泉寿郎「松本白華と玉川吟社の人々」（『日本漢文学研究』（二）二〇〇七年三月）。
- (36) 白山市立図書館蔵『西塘詩草』。
- (37) 「公說墨余録及劫余詩選、知大江之南有毛・斉二先生也。擘東瀛鄙人、少隱於縮林、遭本朝更始之際。妄言時事誤任吏職、筆硯荒蕪、旧業廢矣。本年正月辞官来滬、勾当本願寺別院。近与錢子琴君往往談及二先生。擘景慕是極。即介人子琴君呈所作之詩二卷、就正於硯北。昔蘇子嘗見韓富二公、終身為榮。茲二先生年高、学富。名重一時、今之韓富也。擘何人斯敢狂妄如此。抑有說鄙稿得 大雅斧鉞、送致之本国、使儕輩知今日之榮。与文字之文無東西也。故忘瀆冒、猥呈笑於大方云爾。明治十年十二月。日本松本擘再拜伏乞。对山毛先生閣下、玉溪斉先生閣下。裁正」。
- (38) 法水光雄「北方心泉年譜〈稿〉」（『金沢大学教育学部紀要（人文科学・社会科学編）』三一、一四八―一六四頁、金沢大学教育学部、一九八二年）および前掲注12岡崎正純『支那在勤雑志』。
- (39) 金沢市教育委員会文化財課編『金沢・常福寺歴史資料図録』（金沢市文化財紀要一七七、二〇〇一年三月）。
- (40) 頼襄子成著、錢樸子琴評閱『日本外史』全二十二卷（讀史堂、一八八九（光緒一五）年）。
- (41) 「余至日本屢矣、與其國士大夫交言論之間、而我國之古之政治、山川風物、無不源々本々、洞悉無遺、而其國之禮樂政教、明主賢臣、茫乎、其未有問也、不禁惘然者久之、蓋彼皆讀我國之書、而我未讀其國之書也、於是遍閱其史乘、紊文字晦澁、不終卷欲眠、後得外史讀之、凡二十二卷、其中自平源專政包舉宇内、迨至陪臣執國命、而宰制實瀛、後則英賢崛起、豪傑奮興、割據分裂、由分而合、由合而分、八九百年事蹟包括無遺、五畿六道之風土人情、昭然若揭、至於文章之工離奇、操縱無不如意、叙事簡賅、議論明通、褒貶微顯、真良史之才、文章之矩矱也、丁丑秋、問居無事、勤加玩索、喜其筆法嚴密、一秉左史、遂謬加朱墨、固知史傳體例、只用提綱、從無評讚、何必多此一舉、以遺譏大雅乎、夫亦出於情之所不容已、使同好有人如背

寶山、極口歎絶、竟自忘其醜矣、脱稿後質諸芥玉溪先生、先生曰、子不見蘇批孟子乎、聖經賢傳、尚加評讀、况外史乎、方今聖天子撫綏懷柔、中外輯睦、四海一家、英國有英國史、美國有聯邦誌略、日本亦不可無史乘、以攷之可爲採風問俗者之助、余遵其意、同曹子叔培衷心校閱、勉力成功、故叙其緣起如此、時光緒四年戊寅十月、子琴錢懌識」。(前掲注40『日本外史』錢子琴序)。

(42) 『日本外史』在中国的翻刻、并由錢子琴評閱、無疑裨益于中国人对日本認識的深化。」趙建民「論《日本外史》的撰刻和在中國的流傳」(『晴雨耕耘錄日本和東亞研究交流文集』上海人民出版社、二〇一四年四月)。

(43) 復旦大學歷史系編『中華書局与中国近现代文化』(上海人民出版社、二〇一三年一〇月)。

(44) 二〇一八年三月七日、筆者は白山市立図書館に出掛け、図書館長の許可を得て、松本白華文庫を隈なく調査したが、肝心の「外史翻刻計算」は見当たらなかった。

(45) 『信達二郡村誌』(福島市教育委員会、一九八四年三月)に載せられた中川英右の略伝には「雪堂翁、氏中川、子字英助、後英右ト改ム。諱ハ子朧、字伯淵、雪堂ハ其号ナリ。父諱ハ富方孝太ト称ス。翁其長子ナリ。世々米沢藩ニ仕ヘテ儒員タリ。翁幼少ヨリ家学ヲ修メ、経史該博、又絵事ヲ嗜ミ竹籙ト号シ、善飲酔ヘハ必ス筆ヲ呼ヒ蘭竹ヲ写ス。豪放自逸晋代七仙ノ風アリ。(中略) 晩年福島県庁文書科ニ出仕シ信達二郡誌ヲ編集シ、福島ニ留寓スル年アリ。(中略) 明治十九年十一月三日ヲ以テ最上山形ニ於テ没ス。享年七十一。」(九七頁)とある。

(46) 拙稿「副島種臣と芥玉溪―明治一〇年、上海にて―」(上)(下)(書法漢学研究会編『書法漢学研究』第一三、一四号、ア―トライフ社、二〇一三年七月、二〇一四年一月)、前掲注3「副島種臣の清国漫遊」。

(47) 故草森紳一氏旧蔵写真。

(48) 前掲注4『副島種臣全集』第一卷、二七頁。

(49) 「留別申江諸君有作 六首」、前掲注4『副島種臣全集』第一卷、三四頁。

(50) 長尾直茂「明治時代の或る文人にとっての中国―明治十一年、吉岡拜山の清国渡航をめぐる―」(『山形大学紀要(人文科

学』第一五卷第一号、一九〇四二頁、二〇〇二年二月)。長尾直茂『吉嗣拜山年譜考證』(勉誠社出版、二〇一五年十一月)。図14の画像は、筑紫野市歴史博物館より提供を受けた。

(51) 上洋馬馥堂、光緒四年(一八七八)刊。表紙が『骨筆題詠 江南游草 江南游草後』となっているものもある。

(52) 『讀賣新聞』明治十二年六月二十日号。

(53) 谷口鐵太郎編『藍田谷口先生全集』卷四(非売品、一九二五年二月発行)、一五―一六葉。

(54) 『郷土の書家・画家 中川南巖 中川梅溪』(東浦町郷土資料館調査報告第二集、二〇〇一年三月)。

(55) 東浦町郷土資料館蔵(中川南巖関係資料目録(南巖関係資料)二〇)。

(56) ただし、副島の詩の原文は、「人間万事類困棋、勝敗無常恰可悲、正是功成名遂日、況逢世泰歲豊時、登山涉水方為得、長嘯高歌猶恨遲、料理家園兒輩在、秋陽皞皞復何思」となっている。

(57) 福田忠昭『振遠隊』(非売品、一九一八年一月)。

(58) この碑は現在、西小島二丁目の仁田佐古小学校裏手にある。碑文「振遠隊戦士遺髮碑、鹿島、谷口中秋撰。長崎府兵。曰振遠隊。明治元年。知府澤公。伝 勅於隊兵。從官軍。征奥羽賊。七月十九日。我兵一大隊。乘蒸氣船。發長崎。廿三日。着羽州船川。遂至秋田城下。謁總督九条左大臣。醍醐少將。及澤公受命。左大臣賜之旗章。直進兵到平鹿郡。戰於岩崎川。戰最烈。進陣於最上口。此時米沢賊降。官軍向越。使我隊更向南部。戰于国見坂。攻岩手郡。南部氏乞降。仍進入盛岡城。既而奥羽諸城皆平。王師凱旋。總督府令於我隊曰。將挙為近衛兵。且在此待命。於是。為總督府守兵。是役戰死者。士官則西知彰等七人。兵卒則峰宗之等十人也。箱館之役。我隊乘朝陽艦赴之。自海上転闘而進。抵箱館。戰艦忽沈。樂生二人戰死焉。此年十二月廿六日。於長崎小島郷楠公社側。新築招魂場。葬遺髮於此。嗚呼。奥羽之捷。雖由六軍勤王之功。蓋亦不可謂非我隊戰死諸人之力矣。吉村元善。曾在隊中。与隊長石田栄吉及同志謀。建石於場中。乞余記之。元善余門人。現為陸軍少尉。乃為銘曰。為忠義鬼、為勤王師、死生無愧、永隣楠祠、岡高海緑、魂乎安之。明治十二年七月二十六日、江蘇、子琴錢懌書。」

(59) 『JACAR (アジア歴史資料センター) RefB16080038400』職員並履歴二関スル各庁往復書/第一卷(6163001)(外務省外

交史料館)。

(60) 前掲注5 『対支回顧録』下巻、八六頁。

(61) 興亜会については、『興亜会報告・亜細亜協会報告』全二巻(不二出版、一九九三年九月)の黒木彬文・鱗澤彰夫両氏の解説参照。

(62) 『興亜会仮規則』(一八八〇年二月)。

(63) 『興亜会報告』第六集(一八八〇年六月三三日刊)。

(64) 愛知県知多郡東浦町郷土資料館所蔵。

(65) 『幕末明治中国見聞録集成』第二〇巻(ゆまに書房、一九九七年一〇月)三一頁。

(66) 前掲注4 『副島種臣全集』第一巻、二七五、二七六頁。

(67) 前掲注4 『副島種臣全集』第一巻、二〇七葉。

(68) 齊玉谿については、前掲注46 「副島種臣と齊玉溪、明治一〇年、上海にて」参照。

(69) 東浦町郷土資料館蔵『冊子 南巖釣史硯池余興』(中川南巖関係資料目録(南巖関係資料)五)。